世界の保育研究・保育実践の動向

――OMEP 第 68 回世界大会報告――

渡　邉　眞依子

2016 年 7 月 4 日～8 日、韓国・ソウルの梨花女子大学において、OMEP（世界幼児教育・保育機構）の第 68 回世界総会･大会が開催された。報告者は、平成 28 年度基盤研究（B）「教育と社会福祉の連携によるウェルビーイングの実現をめざす教育福祉の総合的研究」（研究代表者：望月彰）による調査研究の一環として、7 月 6 日～8 日に行われた世界大会に参加した。報告者の印象に残った内容を中心に、大会の様子を報告する。

1．OMEP 第 68 回世界大会の概要

OMEP は、幼児教育・保育のすべての面に貢献する国際的な非政府（NGO）非営利（NPO）組織で、すべての子どもたちのより良い発達と幸せのために、最適条件を用意することを目的としている。世界の主要都市で毎年世界大会が開催されており、第 68 回大会は韓国･ソウルで開催された。

7 月 6 日～8 日に行われた世界大会のプログラムは次の通りである。大会一日目（7 月 6 日）：開会式、基調講演、シンポジウム 5 件、ワークショップ 5 件、個人発表 17 部会、歓迎レセプション。大会二日目（7 月 7 日）：ポスター 129 件、展示、基調講演 2 本、シンポジウム 7 件、ワークショップ 5 件、学校訪問、バンケット。大会三日目（7 月 8 日）：シンポジウム 6 件、ワークショップ 4 件、個人発表 9 部会、閉会式。

韓国、中国からの発表が圧倒的に多く、他にタイ、香港、シンガポール、日本などのアジア、ニュージーランド、スウェーデンの発表が比較的多かった。大会参加者は、中南米やアフリカも含め、世界各国から集まっていた。

2．大会テーマと基調講演について

今大会のテーマは、“Transforming Early Childhood Systems for Future Generations” であった。大会一日目に、Scharon Lynn Kagan 氏（コロンビア大学）による同名の基調講演が行われた。講演では、将来のために保育の「システムを考える」ことの重要性が述べられた。今日の幼児教育の質の低さ、機会の不平等、一貫性のない財政施策などの問題を解決するためには、これまでのように「プログラム的に考える」のではなく、「システム的に考える」ことが重要なのだという。プレゼンテーションでは、8 つの歯車がかみ合っている図が示され、1 つでも不具合があればシステム全体が動かないことが説明された。8 つの歯車とは、①教育の質、指導と学習、②ガイドライン、カリキュラム、アセスメント、③規制と監査のプログラム、④専門家の成長、⑤資金調達メカニズム、⑥管理、⑦家族やコミュニティの参加、⑧コミュニティの健全な背景である。教育の内容だけでなく、行政、経営、教員養成、家庭・地域など、幼児教育を取り巻き、成立させるあらゆる要素が含まれている。幼児教育の発展のためにシステム全体を考え改善していくということは、当たり前のようではある

が、「8-1=0」という言葉に改めて、バラバラなプログラムではなく、「システム的に考える」という意味に気づかされた。

大会二日目には、Samuel L. Odom 氏（ノースカロライナ大学）の “Inclusion of Children with Disabilities in Early Childhood Education” と Arjen Wals 氏（Wageningen 大学）の “Protecting and Expanding Children’s Innate Sustainability through Intergenerational Ecologies of Learning” の基調講演が行われた。Odom 氏の講演では、インクルーシブ教育の課題がシステム的に整理され、具体的なストラテジーも紹介された。Wals 氏の講演は、OMEP がプロジェクトとして取り組んでいる ESD（持続可能な開発のための教育）に関する内容で、今、幼児教育で「環境」を問題にする意義と具体的な取り組みを知ることができた。

3．学校訪問について

今大会で非常に印象に残ったことの一つは、学校訪問である。報告者はソウル市郊外にある私立幼稚園（Public Independent Kindergarten）、Seoul Cheonggyesup Kindergarten を見学するツアーに参加した。幼稚園の関係者から園の概要について説明を受けた後、園内を自由に見学させていただいた。夕方に訪問したので、子どもたちは教室にはいない状態であった。

（1）学校（幼稚園）の概要

Seoul Cheonggyesup Kindergarten は、2015 年に設立されたばかりの新しい幼稚園で、教育省推薦の安全教育のモデル校でもある。

園児数は、3 歳児：3 クラス 51 名、4 歳児：4 クラス 74 名、5 歳児：3 クラス 81 名の計 206 名。子どもと保育者の割合は順に、1:17、1:23、1:27。教職員数は合計 26 名、内 10 名が有資格の教師である。保育時間は 9:00～13:30 の半日制だが、7:00～20:00 の放課後クラス（保育クラス）もある。放課後も利用しているのは、3・4 歳の異年齢クラスが 20 名（教師 1 名）1 クラス、5 歳児が 20 名（教師 1 名）1 クラスであった。

デイリープログラムは次の通りである。

表 1　通常クラスのデイリースケジュール

時　間	内　容
9:00～ 9:10	登園と挨拶
9:10～ 9:30	集会
9:30～ 9:45	軽食とミルク
9:45～10:45	アクティビティの計画と自由遊び
10:45～11:00	遊び（アクティビティ）の片付けと振り返り
11:00～11:50	外での自由遊び
11:50～12:10	大グループまたは小グループのアクティビティ
12:10～13:00	昼食
13:00～13:30	日々の評価と解散

表 2　放課後クラスのデイリースケジュール

時　間	内　容
7:00～ 9:00	登園と静かなアクティビティ
9:00～13:30	通常クラスのスケジュール
13:30～13:40	出席確認とデイリースケジュールの紹介
13:40～14:30	グループアクティビティと身体的アクティビティ
14:30～15:00	休憩
15:00～15:40	片付けと午後のおやつ
15:40～16:40	特別アクティビティと自由遊び（大・小グループのアクティビティと個別のアクティビティ）
16:40～17:00	日々の振り返り
17:00～17:30	最初の解散と視聴覚教材による教育
17:30～19:00	小グループ活動、ストレッチ、個別の解散
19:00～20:00	個別のアクティビティと解散

（2）豊かな保育環境と財源

幼稚園からの説明によると、園の運営は政府財源と自由教育分の授業料でなされている。園の設立にかかる費用も援助してもらったという。その理由についての説明はなかったが、韓国では就学前教育の無償化政策が進み、2004 年の幼児教育法で「幼稚園の設立や人件費を国や地方自治体が

補助する」とされていることから、私立幼稚園でも援助があったと思われる。

幼稚園は5階建てで、最上階はベンチや小さな畑などがある屋上、4階にはカフェテリアや視聴覚教室、1〜3階に保育室やプレイルームがある。建物や設備は新しく、全体的に明るい色使いで、木材も多用されていて優しい雰囲気である。子ども用の本棚が各クラスだけでなく、プレイルームなどの共有スペースのあちこちに置かれている。

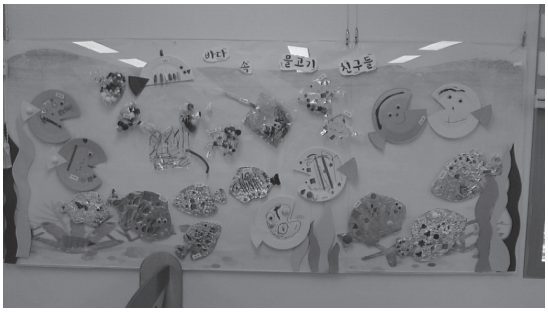
各保育室の壁には、子どもの作品を用いた壁面構成や、テーマ活動に関連する掲示物が貼られている。子ども用のベンチや机、造形活動に使えそうなさまざまな素材を入れている棚などの他に、保育者用の机とパソコンも各保育室に置かれている。子ども用のロッカーの上には、一人ひとりの子どものポートフォリオファイルも並べられていた。学年ごとに共通のテーマ活動をしているようで、各保育室にはそのテーマに関するコーナーが残されていた。アイスクリーム屋さんや海苔巻き屋さんで遊んでいる3・4歳児クラスでは、お店屋さんごっこ用の棚やコンロ・シンクの付いた棚も用意されており、よりイメージを膨らませやすい環境が整っていた。5歳児クラスでは、植物・虫に関するコーナーがあり、関連する掲示物や図鑑などが置かれていた。

（写真①：教室の全体の様子）

教材室にも色画用紙などの教材・教具が大量にストックされているなど、子どもたちの遊びを十分に発展させるための素材・環境が豊富に取り揃えられていることが、非常に印象的であった。さらに、テーマ活動やポートフォリオを取り入れている点などから、イタリアのレッジョ･エミリア･アプローチの影響が感じられた。

（写真②：アイスクリーム屋さんのコーナー）

（写真③：いろいろな教材・素材）



（写真④：壁面構成）

4．その他のプログラムについて

今大会では、ワークショップ1部会（「カリキュラム」部会：“Walking the talk: Exploring teacher-

child dialogues that support children's agency for social justice"）、シンポジウム2部会（「文化と社会」「カリキュラム」部会）、個人発表3部会（「文化と社会」「カリキュラム」「文化と社会／カリキュラム／政策」部会）に参加した。個人的に印象深かった発表について、以下で報告する。

シンポジウム"Bridging the world, bridging the generation"（「文化と社会」部会）では、韓国と他国（チェコ、ギリシャ、エル・サルバドル、ハイチ、ガーナ、パキスタン）との異文化交流実践が報告された。お互いの国の遊びや風習の共通点や違いを見つけたり、その情報を交換し合ったりするなどの実践が紹介された。韓国次世代組織委員会からは、韓国の直面する多文化社会に向け、幼稚園の教員養成における多文化教育・理解の必要性が報告された。英語圏以外の国・文化との異文化交流や異文化理解の実践が展開されているということが印象的であった。

シンポジウム"Place and space for social and cultural sustainability – Preschool in focus"（「カリキュラム」部会）では、ESDの社会的・文化的側面に着目した発表が行われた。特にPark, E. 氏（梨花女子大学）とSamuelsson, I. P. 氏（スウェーデン・Gothenburg大学）による、スウェーデンと韓国の幼稚園教師のESDに対する意識の違いに関する発表（A study of Swedish and Korean early childhood teachers' perception and attitude on Education for sustainability）は興味深かった。Park氏らによると、スウェーデンはESDや環境教育の歴史が比較的長いが、ESDについて知識があると答える幼稚園教師の割合は、韓国に比べて低い。しかし、スウェーデンでは人権に関する活動を子どもたちとともに行っており、興味のあるトピックの行動に焦点が置かれている。一方、最近ESDについて関心が高まってきている韓国では、教師はESDについての知識はあり、教師による環境問題に対する活動は行われている。しかし、知ることに焦点が置かれ、子どもたちとの活動はまだ少ない。韓国では生物多様性や経済が中心であるのに対し、スウェーデンでは人権や資源の使われ方についての批判的な見方が中心となる、といった傾向も見られるという。スウェーデンの教師たちはESDとして認識していなくても、人権や平和、文化、ジェンダーといった社会的問題や生産などの持続可能性を重視していることがわかった。

個人発表の「カリキュラム」部会では、クロアチアの幼稚園でのデジタル環境に関する報告、中国のプレスクールにおけるジェンダー教育に関する報告、アメリカにおける低所得者層のプレスクールのカリキュラム（iPadに触れる機会や直接体験による社会文化的知識の学習、ホームワークを取り入れたカリキュラム）に関する報告、タイの幼稚園における環境教育（川と洪水、生活のための米、私たちの象、歴史的な場所をテーマにしたプロジェクト活動）の報告などがあった。メディア、ジェンダー、貧困、環境問題といったESDに関わる各国の取り組みを知ることができた。

「文化と社会／カリキュラム／政策」部会では、韓国の幼児教育政策に対する親の意識調査の報告が、韓国同様に少子化問題を抱えている日本にとって興味深い内容であった。韓国の保育・幼児教育の無償化政策は親たちから肯定的に評価されているものの、少子化の解決策にはなっておらず、経済的支援よりも産休育休制度やフレキシブルな働き方などの他の政策が必要であるという指摘がなされた。子育て家庭に対する経済支援だけでなく、社会全体での子育てや働き方に対する意識改革と制度整備の必要性を改めて確認することができた。

5．OMEP世界大会参加の成果

大会の最後には、誕生から8歳までの子どもの生きる権利と発達の保護、とりわけ、難民の子どもたちの保護等を各国政府に緊急要請する大会宣言が承認された。今回の世界大会への参加により、子どもの権利を守るというOMEPの役割や、OMEPの取り組んでいるESDの考え方、すなわち、環境問題だけの持続可能性ではなく、人権や

平和などの文化的・社会的側面が重要であることを知ることができた。また、他国、とりわけ韓国の保育･幼児教育の実態にもふれることができた。課題はあるようだが、就学前教育の無償化、子どもの遊びとそのための環境の充実といった点は、学んでいきたい点であった。日本 OMEP の先生方との交流・情報交換も貴重な経験となった。

（写真⑤：大会受付付近）